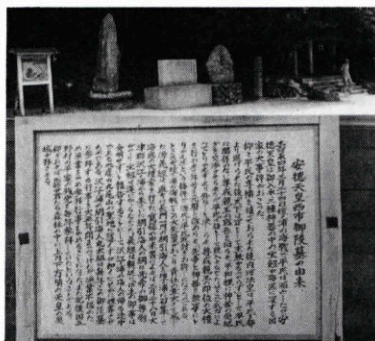


わがむらの昔ばなし

安徳天皇御陵墓伝説と沢江浦

文化財専門委員
福江芳朗



は遂に発見することができなかつたが、童姿の天皇の御尊骸を網で引き上げることができた。直ちに源氏の大将へその旨を申し上げたところ、宝剑探索に源氏の意向が主となつていたのであろうか、「その網の中のもの、その方どもにまかすから、如何ようにも取り計らえ」と申し渡された。

きな鳥賊が二匹生きたまま入つていて、淵の中へ沈んでいった。その後も毎年三月二十四日の御陵墓の御祭りの折には、淵の水面に浮かび出たといい伝えられている。この御尊骸を網で引き上げた功績で、沢江浦の漁師は、東は石見国境から西は下関までの間、北浦の海辺ではどの浦で網漁をしても差し支えないとの御許しを得たという。

寿永四年、源平両氏が長門国壇の浦に戦い、平家は敗れて滅亡したが、その際平家の軍中にあつた安徳天皇は、二位の尼に抱かれて海中に入られ、三種の神器の一つである草薙の剣と共にその所在がわからなくなつた。そこで、源氏の大將は諸国津々浦々に命じて漁師を呼び集め、海中を探らせたが、潮の流れが速くて容易に見出すことができなかった。

その折、三隅莊沢江浦の漁師の網頭弥吉・甚兵衛もお召しに応じて出かけ、「口籠網」をもって探したところ、宝剑

依つて、弥吉・甚兵衛たちは、御尊骸を網に包んだまま沢江の方へ持ち帰つて、豊浦郡と大津郡の境までたどり着いたところ、俄かに御尊骸が重くなつて動かすことができなくなつたので、こゝに御陵墓をつくつて丁重に葬つた。すなわち、現在の豊浦郡豊田町大石(王居址)丸尾山の安徳天皇御陵墓伝説地である。なおこの時御尊骸を包んで来た網を掛けた森を「網掛けの森」と呼んでいる所が、少し西の方にある。また網掛けの森の下に深い淵があつたが、こゝで網を洗つたところ、大

「現今ニ於テモ、御祭礼ノ節ハ参詣シ且往古ヨリ幟ノ寄進ヲ仕候 右破損之時ハ地吉村ヨリ通知スルノ旧例ニシテ既に昨明治二十五年ニ於テ報知ニ依リ幟新調之

文芸

俳句

清風句会

七月定例 (順不同)

因藤 兔史
方丈に一穂揺る、梅雨の燭
妻二日在らず事足る冷奴
池田 久子
天の川星をふちどり人を呼ぶ
梅雨明けて虫鳴きはじむ蒸し暑
さ
齊藤 元
大あじさい激しき雨や句碑の寺
花外の碑六十年目禪を吐く
田村 九重
梅雨明けの報らせを待つや旅心
甲子春花外笠置く禪の寺
笹見 梅雪
明峯寺熱血花外句碑涼し
筆太し白雲閣や涼をよぶ
大深 八重
山風を内ふところに冷奴
山梔子の真白の花とよこれ花
岩本さつき
娘の植まじし百合想ひ出なつか
しむ
花外句碑除幕あつぱれ梅雨晴間
一言に百合にねぎらう幼な蝶
嫁呉れし冷奴老の心晴れ
選者 追吟
永田 石山
梅雨明けて岬はるかに海女の列
千尋の谷を脚下に冷奴

山中 重女
大小の蝶の活躍梅雨の明け
手作りの風味の良さや冷奴
宮垣 萬女
梅雨明けの雷びく庭の石
昨日見た笹百合今日はまなうら
に
上田 雪子
干竿や干すだけ蛙前すすみ
梅雨明けて満天の星に嶺浮ぶ
仁保 民子
曉遠く色まだ濃ゆし天の川
生き生きと鮎はね上る噴水池
岡 松月
乱れ咲くさつきの里に句碑薫る
梅雨晴れやみくじに乾く鳩の糞
宮永ミネ子
胸うすし嬪の昼餼冷奴
梅雨晴間二十一世紀の森に付つ
山崎 菊女
五月開白き百合花下に向き
百花あり中に一輪百合の花
立間 雅子
水無月の真午を荒く降る雨と雲
を抱きて山は烟りぬ
岡 松子
産みえし水辺を暫し飛び巡り
ふり切ることくやんまは去れり
伊藤シズエ
ひもすがら烟る霖雨に術もなく

短歌

三隅短歌会

7月作品

安藤 芳江
窓の辺のたわみ小枝に小鳥来て
ゆれつつ啼くは心たのしも